

仏教と COVID-19 の恐怖

Achan Sujin Borihanwanaket * と

DJ Banchorn Wichiansri * * との対話

* 1927 年タイ国・Ubon Ratchathani 生まれ
1956 年より仏教の研究者・説法師として活躍
<https://www.dhammadhome.com/>

* * Sipping Coffee beside the Forum ・ホスト
タイ国・Prince of Songkla 大学
Hat Yai キャンパス・ラジオ局

仏暦 2563 年¹・5 月 21 日・土曜日

¹ 西暦 2020 年。

DJ Banchorn Wichiansri: 今日、タイを含めて世界中でコロナの脅威が広がっています。いったい世界がどのように変貌していくのか私達には分かりません。どれ程の人々が死に直面するのか予測がつきません。タイでは地方からバンコクに来る人々にはコロナ感染の心配はつきません。コロナのみでなく、他の病気あるいは犯罪などで日々こころの休むことがありません。コロナが広がるこの状況を、仏教徒はどのように捉えるべきでしょうか。

Achan² Sujin Borihanwanaket: まず質問したいのですが、コロナの発生を抑えることは可能でしょうか。仏教的観点から言うならば、誰かがそれを発生させたり・押さえたりすることはできません。すべては条件によって起こるものです。誰かが何かをし得るというものではないのです。そうやってしまえば、単純なことなのですが、問題の芯はもっと底深いものです。

どのような危険に囲まれていようとも、日々の生活にあつてのマコトなることは、見ること・聞くこと・嗅ぐこと・味わうこと・触れること・考えることです。それらをコントロールすることはできません。なら、いかにして外からの危険をコントロールすることができるでしょうか。それらの五感覚器官とところで経験するものは条件によって起こるものであり・この真実はじつに微妙なものです。

コロナの危険があることは確かですが、そのような状況でも、見ること・聞くこと・嗅ぐこと・味わうこと・触れること・考えることは、今ここで瞬時・瞬時に起こっているのではないのでしょうか。

そのような今ここでの現象をコントロールすることができないのなら、どのように迫り来るコロナの危険をコントロールすることが可能でしょうか。現象と呼ばれるものは条件がととのえば、起こるものです。それらをコントロールする人などは存在しません³。ものごとは私たちが望むように起こるものではありません。

² Achan・アーチャーンとはパーリー語で ācariya。先生との意味。

³ 理解・Understandingを培う「人」というものは存在しない。しかし適切なる条件が揃う時、存在するマコトなるもの・現象が理解の対象になる。

何かが起こる原因がある時はそれにそって起こるものなのです。コロナは条件によって起こることのよい例だと言えるでしょう。それをコントロールし得る人はいません。コントロールし得るエージェントなどありません。ものごとはあるがままに起こっては消え去るものです。コロナを考えなければ、コロナは存在しません。それを考えることがなければ、消えてしまうものです。

DJ: コロナを恐れ・避けることは正しいことでしょうか。

AS: コロナを避けるのは無理なことです。しかし感染を避け得るなら、可能なかぎりの対応策はとるべきです。しかしコロナに感染しないという保証はありません。ブッダは我々に近い原因・遠い原因を示されました。本当の原因を知るまでは我々はただ怖がるばかりです。今はコロナを恐れますが、将来またどのようなことで恐れなければならないか分かりません。私たちは容易く恐れます。良きこと (kusala) 悪しきこと⁴ (akusala) に関する原因を知らないからです。ある人々には良きことが起こり、別の人々には悪しきことが起こります。どうしてある人々はコロナにかかり他の人々はかからないのでしょうか。

DJ: 不注意でないなら、事故・犯罪・病気・自然災害に遭遇することはないでしょう。

AS: コロナに感染した人々は、それにかからないような対処をしたのでしょうか。多くの人々はしたかも知れませんが、かかってしまったということです。反対に、感染に気をつけなかった人々のうちで、感染した人も・しなかった人もいるわけです。コロナに気をつけることなく・感染を避ける処置をとることがなければ、かかり易くなることでしょう。気をつけているのに、感染する人もいれば、気をつけてなくとも、感染しない人もいます。これはどうしてなのでしょう。

DJ: とても気をつけている人でも、感染すると聞きました。

⁴ Kusala とは善・モラル的に良・健全・メリットのあるもの。カルマの点からして益のある行為。Akusala はその反対。邪悪・モラル的に悪・不健全・メリットのなきもの。

AS: いくら気をつけていても、条件がそろえば、病気になることがあります。条件が整うことがなければ、病気になることはありません。私たちの行為・カルマ⁵はかならず結果をもたらします。それゆえ瞬時・瞬時、あるいは一生から次の一生にかけて、生・存在が起こります。私たちは幸せなことあるいは辛いことに遭遇します。良いことばかり・悪いことばかりではありません。ある人々は身体的な痛みを経験するが、メンタルな痛みを経験することはないし、他の人々はメンタルな痛みを経験するが、身体的な痛みを経験することはありません。原因というものに対する理解がなければ、いずれの原因が良い結果を・あるいはいずれの原因が悪い結果をもたらすかは理解できません。

DJ: なんだか、自分で何かをしなければならぬわけではないのですね。何かが起こるなら、それは起こるべきにして起こるとのことなのですね。特別に何かをやらなければならぬわけでもないのですね。でもそれは不注意と言えるものではないのでしょうか。

AS: すでに間違った考えをしているのですよ。無智がゆえに、何もする必要はないと考えてしまうのです。良き人間であるべきではないし・良き行為をする必要もないと考えてしまうのです。

RJ: 確かに。

AS: コロナに感染する理由を考える時、考えるのは単にその感染予防策のみです。本当の理由というものを考えることはありません。原因が善なら・結果も善ですし、原因が悪なら・結果も悪です。どうして多くの人々は疾患・身体障害なしで生まれてくるのでしょうか。どうして他の人々は疾患・身体障害を抱えて生まれてくるのでしょうか。我々はいずれ何らかの原因で死んでしまうのです。私達は、原因が何であるかも分からず、良い結果のみを求めます。(ブッダが説く、) 良き行為は良き結果を・悪しき行為は悪しき結果をもたらすというのは永遠な

⁵ Kamma、サンスクリット語で karma、とは身・口・意で為される意思を伴った行為のこと。行為の種類によって良きあるいは悪しき結果をもたらす。ゆえに Kamma とは行為を意味するものであって、世間一般で運命論的に解釈され、「それは私のカルマだから仕方がない」などのような「結果・vipāka」を意味するものではない。カンマは精神的現象であり蓄積されていくもの。諸々に蓄積されたカルマは諸々の結果を生み出す。これが因果応報 (kamma and vipāka)・倫理的な因果関係。

る真理です。この真理を忘れて、自分では何もする必要がないなどと思ってしま
うのです。そのような思いは悪しきことです。日常にあってどのようなこ
ろ・行いを培うべきかを理解していません。

DJ: なら何もしなくてもいいと考えるのは悪いことですか。

AS: その通りです。何もしなくても大丈夫というのは間違った考えです。チャン
スに任せればいいとか、何もする必要はないという考えがあるかぎり、悪しきこ
ころは続きます。今日コロナが蔓延するなか、人々は互いに助け・傷つけないよ
うに気を配っています。親切さと他の人々への思いやりが、ものごとをスムーズ
に運んでいきます。反対に悪いところが起こるなら、ものごとが悪い方向に向か
っていきます。良き・悪しき言葉・行為が、良き・悪しき結果をもたらすとい
うことをすぐに忘れてしまいます。私たちは単に自分自身を護ることのみに気を
使いますが、これは本当に悪しきことから自らを護ることになのでしょうか。

DJ: 善とはどのようにものなのでしょう。どのようなものが善であるかはか
なり意見が分かれるようですが。

AS: ブッダの教えを聞いた人と聞いたことのない人ではその理解が異なるの
ではないでしょうか。

DJ: そうだと思います。

AS: 因果の意味を深く理解するためにブッダの教えを聞くべきだと思います。
今この瞬間にあって、音が聞こえるのではないですか。その音を聞かないよう
にするのは可能でしょうか。

DJ: それは無理です。

AS: すべては自分勝手に起こっているようです。どもそれは正しくはありませ
ん。音を例にとれば、それは森のなかで起こっているかも知れません。別の部屋
で起こっているかも知れません。でも我々がじっさいに聞く音は耳に直接入っ

て来る音のみです。聞くことの対象となる音のみです。これはとても難しいテーマです。聞こえた音は良き行為の結果なのか・悪しき行為の結果 (Vipāka) ⁶なのかを知ることは難しいのです。

一瞬・刹那というのは更なる細かい時間に分けることができます。見る一瞬・聞く一瞬・嗅ぐ一瞬・味わう一瞬・触れる一瞬・考える一瞬に区別することが可能です。日常にあって瞬時に起こり瞬時に消え去る現象。永久的なものは何もありません。とても速く起こる現象がゆえに、個別に区別することは不可能のように思えます。(区別することができなければ、)一つのストーリーから次のストーリーに移るだけで、完全に消え去るものです。コロナの流行もまたストーリーの一つに過ぎません。熟睡中は何かを見ることも聞くこともありません。でも目を覚ませば、すぐに、自分自身に対する執着が起こり・それゆえに心配事が始まります。でも何が善であるかを知り、良き行いを行うならば、何に対しても心配することはありません。

DJ: 本当の危険とは、人々が今恐れていることではないということですよ。私たちは単に外的な要因を恐れ・変化を恐れているということではないでしょうか。

AS: そうですね。誰もがコロナを恐れています。でも誰もが感染するわけではありません。条件が定められた人々のみが感染するわけです。さもないと、全ての人々が既にそれに感染してしまっていることになります。個々人に何が起こるかに関わりなく、その人だけの理由というものがあります。とっても複雑なことです。徐々に何に恐れているのかが理解し得てきます。

生まれがあれば、恐れが起こります。生まれた時から、恐れを抱きます。恐れを抱かない人はいません。恐れは重大なものに関わる必要はありません。例えばアリとかトカゲなどでも恐れを引き起こします。自分自身が何に恐れを抱いているかを理解しないがゆえに恐れが起こるのです。恐れることに何か良いことがありますか。恐れを理解し得るとのこと、何事にも恐れない方がいいのではな

⁶ Vipāka とは過去に為された意思を伴った行為の結果。それらの行為において、健全な行為 (kusala kamma) の結果が kusala vipāka で、不健全な行為 (akusala kamma) の結果が akusala vipāka である。

いでしょうか。

DJ: なら、私たちは一体何を恐れているのでしょうか。どうして恐れているのでしょうか。

AS: それは現実世界を理解していないからです。今この瞬間にあるのは無智です。恐れる対象が消滅した後でも恐れるのは無智ゆえです。コロナを話すことがなければ、その考えが消えた後でもまだ恐れはありますか。一部の人達はまだ恐れを持ち続けていることでしょうか。他の人々はコロナのこと以外を考慮することでしょうか。何を言おうとしているか理解できますか。

今この瞬間の現象を理解することがないゆえに恐れを抱くのです。どうしてこの国で・どうしてこの人達に、と考えるしまうのです。私達は現象の生起の真なる原因を理解していません。いったいここで何を話しているのか理解していないかもしれません⁷。でも真実を注意深く理解していくなら、何かが起こるなら起こるべき理由があつてのことと理解し得ます。もし起こる理由がなければ、起こらないとのことです。誰かが起こそうとしても無理なことです。起こそうとするような人はいません。一人一人に起こる理由があり、また他の人々にも起こる理由があるのです。すべては、多様な条件が各個人にあるということです。

DJ: またもし恐れが起こるなら、それは以前に起こった恐れではないとのことですね。恐れは何回も・何回も起こっては消え去るものなのですね。

AS: 消滅することのないものは何もありません。消滅とは終わりに至るということです。消滅とは終わりに至るということであり、けっして戻ってはこないとのことです。立ち去るとは同じことを意味します。消滅・立ち去ったものは、再び探すことはできません。先ほど聞いた音が消滅した後はそれを再び探すことはできません。ゆえに真実は隠されているのです。

DJ: ならば、何がまことの危険と言えるのでしょうか。

⁷ ブッダがこの世に現れる以前には、ダルマ・今ここでの現象を説く者はいなかった。ゆえに聞く人たちはまったく聞いたことのないものを聞くことになった。

AS: 煩惱⁸・無智です。阿羅漢はコロナを恐れるでしょうか。

DJ: これまで聞いてきたところによれば、阿羅漢はコロナを恐れることはありません。

AS: 阿羅漢⁹には煩惱はありません。動揺することはありません。あらゆる結果には原因があることを知っているからです。もし原因が存在し、条件がととのえば、結果は生まれるもので、その生起を止めることはできません。財産の喪失・死・不幸、誰もそれらを止めることはできません。起こるべき時が来れば、起こるものなのです。

DJ: いかにして、それらの恐れは害をもたらすのでしょうか。

AS: それらは危険がいっぱいです。我々は真理の深さを今この瞬間においてさえ理解していません。真理というものを単に我々の智慧におうじて理解しているのみです。聞いたり考えたりして培った智慧はもっと直接的な智慧へと変容します。実に深きものへと変容します¹⁰。ダルマ・現象の深淵さを侮ることはできません。今ここで起こる現象を「我」と見なすことは危険なことです。でも現象のどこにも「我」は存在しないということは理解し得ることです。

すべてのものは例外なく無我¹¹です。我¹²などはありません。火あるいは風（温

⁸ Kilesa・煩惱とは、こころの汚れ・不健全なもの。こころを汚すもの、汚染するもの。それゆえにこころはものごとをありのままに見ることができない。煩惱三種は渴愛・怒り・無智。無智は他二つを常に下支えする。

⁹ Arahant・阿羅漢とは涅槃を証かし、あらゆる煩惱・悪から解き放たれた者。煩惱は次の四段階のレベルを経ながら除去されていく。すなわち、ソーターパンナ（預流者・sotāpanna）・サカダーガミー（一來者・sakadāgāmi）・アナーガミー（不還來者・anāgāmi）・阿羅漢（arahant）。

¹⁰ 理解すればする程、自らがどれ程に理解していないか・どれ程に無智であるかが分かってくる。

¹¹ Anattā とは、無我、根本的な実在のないこと、人的なものの不存在、コントロールのなきもの。精神現象・物質現象（nāma-rūpa）の内部あるいは外部において我が存在する・エゴが存在する・魂が存在するなどみなしえる実体はないとのこと。

¹² Attā とは我・エゴであり、仏教においては仮の表現でしかない。実際に存在するものを指すのではない。これは物質にも応用しえる。テーブルをとらえてテーブルのエッセンス・tableness が存在するとは見做し得ない。

度と動き)¹³は条件があって起こるものです。熱さ・冷たさ、甘さ・塩辛さ、興奮・幸せ、それらは起こる条件があれば、起こるものです。条件がなければ、起こるものではありません。起こって消え去るものが無我だとはなかなか理解し得ません。起こっては消え去り再び戻ってくるものではありません。今ここにおいて、私達がこの世を去るまで、あるのは起こっては消え去る現象のみです。残るものはありません。全ては去りゆくものです。我々が生まれ、実際に「自分と思しき者」は存在しません。瞬間・瞬間、現象¹⁴は起こり・消えいくのみです。けっして戻ってくるものではありません。昨日が今日まで続くものではありません。先ほどが今まで続くものではありません。「無我」を理解するまではブツダを真に知ることはできません。一言・一説を聞いても十分ではありません。たとえば、すべてのダンマは無我 (sabbe dhammā anattā) とはよく繰り返され・よく聞くフレーズです。もし良き・悪しき行為が原因と条件によって起こるなら、それらの結果も原因と条件によって起こります。どこに「我」を探し得るでしょうか。もしコントロールし得る「我」というものがあるのならば、私たちは死ぬことはないでしょう。でも誰もが死ななければなりません。死後、「我」はいったいどこに行ってしまうのでしょうか。

DJ: 今ここで起こっているものをマコトと捉えることは可能でしょうか。

AS: 起こることのないものを、存在していると見なすことは可能でしょうか。

DJ: いいえ。

AS: なら言えることは、何かが存在するのは、それが起こった時だけです。

DJ: その通りです。

AS: 我々は生まれてすぐ、経験するものを「我」として捉え・執着します。生

¹³四大要素 (mahā-bhūta-rūpa) は体の内外に関わらず、共に生起するもの。四大要素とは地の要素・硬さ、水の要素・結合、火の要素・熱、風の要素・動き。

¹⁴ Dhamma・現象は直接に知ることのできる characteristics・特徴を持ち、概念のように考えるのみものではない。それらは二種に分けられる。一種は nāma: mentality で対象を知ることのできるもの、あと一種は rūpa: materiality で何をも知ることのできないもの。

命の一番最初の瞬間¹⁵が起こり、そしてすぐ消滅します。消滅してしまえば、どこに行ってしまったのでしょうか。

DJ: その瞬間の意識は今この瞬間での意識とは異なります。

AS: 全くその通りです。Citta・意識¹⁶の生起時間は非常に短いものです。Citta・意識に関して言えることは、それは起こっては消える対象を捉えるものです。消え去れば次の citta・意識に受け継がれます。例えば、見る citta・意識は視覚刺激を知覚し、知覚した後は直ちに消え去ります。ブッダは Four Noble Truths¹⁷ を悟るまでに長い間、波羅蜜¹⁸を培わなければなりません。ブッダは現象としての sankhāra-dhamma は生起して消滅するものであると解き明かしました。条件によって生まれる現象は永久なものではありません。条件によって生まれる現象は苦¹⁹であります。すべての現象は無我であります。無我に関しては例外はありません。条件に関わるもの・関わらぬもの全ては無我です。起こったものは例外なく消滅しなければなりません。何か残されたものはありますか。例えば、「硬さ」が「見ること」に継続されたなら、その「硬さ」はいったいどこに行ったのでしょうか。それは消滅し、戻ってくることはありません。もし硬さが現れたなら、それは消滅した硬さと同じでしょうか。

DJ: そのようにものごとを見たことはありません。

¹⁵ Patisandhi-citta・結生心、生命の最初の瞬間・最初の citta・意識。再生時における最初の意識。

¹⁶ Citta・意識とは知覚・認識対象をとらえる現象。Citta は次の三つで規定される：agent, instrument, activity. Agent としては対象を認識する。Instrument としては、共起する cetasika の機能を支援する。Activity としては、対象を認識する過程。Activity としての規定がもっと適切なものとみなされている。あくまでもそれは対象を知覚するものであって、agent あるいは instrument を所有するものではない。上のような規定は、agent あるいは instrument を永遠なる我とみなす見解を否定する為。知覚するのは我ではなく citta。それは生起・消滅する現象であって、無常なもの。各々の citta には見ること・聞くことなどの機能がある。対象のない citta は存在しない。(参照： *Comprehensive Manual of Abhidhamma: The Abhidhammattha Sangaha*, by Bhikkhu Bodhi.)

¹⁷ Four Noble Truths・四聖諦とは苦、苦の原因、苦の滅、苦の滅に導く手段。

¹⁸ 波羅蜜は十種。(大乘仏教では六種。)(1) perfection in giving, (2) morality, (3) renunciation, (4) wisdom, (5) energy, (6) patience or forbearance, (7) truthfulness, (8) resolution, (9) loving-kindness, (10) equanimity. それらの資質は菩薩によってこの生死輪廻をめぐる中で培われべきもの。

¹⁹ Dukkha・苦：一般的には身体的な痛みがもたらす苦。しかしもっと深いレベルでは身体的あるいは精神的なものは何であって常ではないとの意味で苦。だからいかなる楽しいことでも、長くは続かないとの意味合いでもって、苦である。

AS: そうですね。そのようにものごとを見ることはありません。この世に存在するものは単なる現象に過ぎないということを理解するまでは、ブツダのことに耳を傾けるべきです。存在するのは単なる現象であって、それらは「我」ではないとのことです。私たちは精神現象（視覚・記憶など）と物質現象（視覚刺激・硬さなど）に私とか私のものとして執着します。コントロールすることができないものをどうして「我」と見なし得るのでしょうか。私たちは痛みを感じたくはありません。でもどうして例えば膝は痛むのでしょうか。どこに自分のものが存在するのでしょうか。数秒前には「我」と見なししていたものが痛みを感じることはありませんでした。でも今どこからか痛みが生起します。またまた「我」が痛みを感じているのです。あるいは自分は痛みを感じていると見なすのです。痛みが消えた時、その痛みはいったい何処に行ってしまったのでしょうか。自分のものと見なししていたものは完全に無くなっています。今ここでの見ること（seeing）を自分のものとみなします。見るものがなくなった時、少し前の見ていた「我」はいったい何処に行ってしまったのでしょうか。

これはすごく繊細な問題です。ブツダの教えに触れる時、それはすごく繊細で奥深いものだと知るべきです。それを理解する時、少しずつ心配事が無くなっていきます。理解するということは良き行いであり、良き結果をもたらすものであり、悪しき結果をもたらすものではありません。

DJ: 痛い・嬉しい・怖い・腹立たしいなどの感情が起こる時、それらはマコトだと捉えます。

AS: 痛みに対処する前に既に痛みというものは起こっているのではないのでしょうか。

DJ: 確かに。

AS: 痛みが起こらなければ、痛みを苦しむ自分というものがあるのでしょうか。

DJ: いいえ。

AS: ということはいつも痛みに苦しんでいるということではないわけです。

DJ: でももし歯が痛むならば、それは痛く・長く続くものですよね。

AS: 痛みは何度も何度も起こっては消え去るものです。数え切れないほどの繰り返しがあるゆえに、長く続くと思うのです・歯がはまだ痛いと感じるのです。でも歯医者がある歯を抜くならば、まだ痛みを感じるでしょうか。痛みが起こった時、誰かがそれを生起させたとは思わないことでしょうか。それは条件に基づいて起こったことなのです。痛みが起こった時、自分が痛みを感じているとの思いが起こるのです。

記憶は「我」ではないとのことに気付くことなく、私たちはこのストーリー・あのストーリーを思い出します。記憶がなければ、自分が思い出すとの思いは起こりません。記憶が起こるなり、自分の記憶としてとらえます。無智・avijjā・がゆえに全てのものを「我」として執着します。もし現象というものを正しく理解するなら、現象が生起した時、それらはマコトであると理解し得ます。それらは生起しますが、それらを生起させる人はいません。いちど生起すれば後は消滅するのみです。それがどれだけ速く起こっているかは想像もつきません。なぜなら点滅するライトが常に灯っていると捉えられるように、瞬時・瞬時の citta は、それが繋がったように捉えられるのです。無智がゆえに見たもののカタチが現れるのです²⁰。目を閉じてください。何かが見えますか。

DJ: いいえ、何も見えません。

AS: 目を開けてください。

DJ: 今は見えます。

AS: 何が見えますか。見えるのは、目を通してあらわれる視覚刺激のみです。私達は人とか、花とか、木とかが見えると思います。視覚刺激・記憶などをもと

²⁰ 参照 : Guhatthaka-suttaniddeso: Upon the Tip of a Needle.

に見たものを概念化しているのです。視覚刺激がなんであろうが、概念が何であろうが、私たちはそれらを記憶します。目を閉じれば、それらは消えてしまいます。生起させることはできません。我々は、目を閉じる前の現象は既に消えてしまったことを理解しません。再び目を開けた時に、再び見えるものは新しい視覚刺激であることを理解しません。それは新しい視覚刺激であって古いものではありません。命とは今この瞬間に存在するのみです。瞬時・瞬時に起こっては消え去るものです。

次のように、ブッダによって示された三種の「死」があります。

Khaṇika-maraṇa とは、瞬時の死。Khaṇika とは「Khaṇa・瞬時」からの派生語。Khaṇika-maraṇa とは瞬時・瞬時の死。今この瞬間に起こっては消え去り・再び起こることのない「現象の死」を意味します。生起・消滅は一瞬のことであり、誰もそれを捉えることはできません。ども（私達は無智ゆえに）起こっては消え去る現象を常に存在すると捉えられるのです。

Sammati-maraṇa・仮の死とは我々が普通言うところのこの世の最後で迎える死・いわゆるお葬式とかかわる死です。Sammati とは「仮の」という意味で、最後という意味ではありません。この死には次の世での再生が待ち構えているからです。ブッダ以外に一体誰がそのことを理解し得るでしょう。ブッダは継続しながら生起・消滅する citta を事細かに説明しました。どのように各々の瞬間が異なるのか。どのように生起するのか。Citta の生起には諸々異なった条件が存在します。まさにこの瞬間において citta は生起し・そして消滅しています。次の瞬間においては別の citta が起こるのです。これが Khaṇika-maraṇa ですが、Sammati-maraṇa は生き物の生命の最後に訪れるものです。

そして最後の Samuccheda-maraṇa とははつ涅槃のことです。阿羅漢の死です。再生のない死です。もし阿羅漢が生死輪廻を継続するならば、ブッダも生死輪廻を継続することになるでしょう。でもブッダには再生はありません。いかなるカタチにおいても存在しないのです。

そしてすべての sāvakas のうちで阿羅漢になった者は、この世で死を迎えることにより、はつ涅槃に至るのです。すなわち、一番最後の citta が起こり終えると、それに続く citta が起こらないとのことで、再生することはないのです。阿羅漢以外の人々は煩惱を携えているとのことで、この世での最後の citta の生起・消

滅の後には再生が待っています。ブッダは上のことを詳しく説いていますが、我々は「我」が生まれ・生存し・死ぬとの考えを持ち続けているゆえに、そのことが理解できないのです。私たちは今生とは、前世にとっての来生であるとのことが理解し得ないのです。

我々に来生が到達したなら、自らが誰であったのかを思い出すことはできません。なぜなら、新しい個人に生まれ変わっているからです。前世で誰が自分の両親であり・兄弟であり・どんなことを行い・どのような楽しいことをしたかは分かりません。今のこの人間であるのは今生においてのみです。死んでしまえば、今の個人は終わりを迎えます。この輪廻²¹においてその個人を再び見つけることは不可能です。

DJ: 阿羅漢は、我々が「継続」と捉えるものは、単なる一瞬・一瞬の繋がりであると理解していますか。

AS: 煩悩は *sacca dhamma* すなわち Four Noble Truths・四聖諦が証かされた時に根絶されるものです。我々がいくらブッダの教えを聞こうとも、奥深きダンマ・*sabhāva* を証かすことがなければ、煩悩を根絶することはできません。煩悩には三つのレベルがあります。すなわち、カタチの荒いもの、中間的なもの、そして *citta* に潜んで表面に現れることのないとても微細なもの。

眠っている阿羅漢と眠っている盗人を区別することはできません。両者において見た目の違いはありません。でも阿羅漢のこころの質と盗人のこころの質はまったくもって異なります。ブッダによって明らかにされたことは今ここにおいて証明することが可能です。どうしてある人々はコロナにかかり・他の人々はそれにはかからないのでしょうか。選択することは可能でしょうか。

DJ: 可能ではありません。

AS: そうですね。これは *anattā*・無我を示すものです。誰かの支配下にあるものではありません。それゆえに *anattā* とは無我・我がないとのことです。あるのはダンマ・現象のみ。一つ・一つの生まれにおいて、起こっては消え去るも

²¹ *Samsāra*・輪廻とは生と死を繰り返すサークル。生まれ・成長し・老い・死ぬのプロセスを数えもできぬ程に繰り返す。

の。ブッダが悟りを開く以前の数えることのできない再生を語る Jātaka・前生経²²で述べられているようなものです。

DJ: 私たちは「真理」を知らないと言われますが、どのような真理を指しているのでしょうか。

AS: いまこの瞬間で何がホントでしょうか。見ることはホントでしょうか。

DJ: 見ること？

AS: 今この瞬間でそれはホントでしょうか。見ることはホントでしょうか。

DJ: 確かに、見ていますが。

AS: ということは、見る事が起こったとのことですね。目がなければ、見ることは可能でしょうか。

DJ: 目がなければ、見ることは可能ではありません。

AS: たとえ目があっても、視覚刺激が目に届くことがなければ、見ることは可能でしょうか。

DJ: 無理でしょう。

AS: ということは、目に届いた視覚刺激のみが知覚されるということですね。正しいですか。

DJ: 条件がそろわなければ、見ることは起こらないとのことですね。

AS: 腕には目はありません。だから腕で見ることはできません。視覚刺激は目に届くのみです。見るということが起こる為には目と視覚刺激が必要です。

DJ: 見たものを触ることはできますか。

²² ブッダの前世に関わる話。

AS: 何かに触れた時、それは一体何に触れているのでしょうか。

DJ: 見たものに触れているわけです。

AS: それは硬いのではないですか。

DJ: 硬さはあります。

AS: 目を通して現れたものに触れることは可能でしょうか。

DJ: 目を通して現れたものに触れることは可能ではありません。

AS: 目で現れる現象と体で現れる現象は分けられるべきです。目で見たと体で触れたものは同じ現象ではありません。目で捉えた硬さと体で感じる硬さとは同じものではありません。硬さ (hardness and softness)、温度 (heat and cold)、結合 (cohesion)²³、そして、動き (movement and pressure)²⁴がない時には、何も目に届くということはありません。それらの要素はあと四つの要素を含めた・分離することのできない kalāpa と呼ばれるグループとして生起します、すなわち、色 (視覚刺激)、匂い、味、滋養²⁵。それらは rūpa と呼ばれる物

²³ Element of water・結合は、体・bodysense を通じては知覚されず、こころを通じて知覚される。体・bodysense を通じて知覚されるのは、硬さ・温度・動きであり、結合・cohesion ではない。水の要素は共起する物質現象に結合・cohesion は与えるもの。(参照：Nina van Gorkom.)

²⁴ Motion・「動き」は見ることができると思うかも知れないが、物質現象としての「動き」を見ることはできない。私たちが「動き」と思うものは物質現象としての風の要素・動きではない。何かが動いたと思うのは見ることと考えることを融合しての概念であり、実際の物質現象としての動きではない。物質現象としての動きは体を通じて直接に知覚されるもの。体あるいは弾力のあるものを押した時、動き・圧力を感じる。この感触によって体や手足の動きの調整が可能となる。これのおかげで、体に力が入り、崩れることはなく、諸々の違った姿勢をとることができる・手足を伸縮させることができる。(参照：Nina van Gorkom.)

²⁵ Eight Inseparable Rūpas: Rūpa は kalāpa と呼ばれる分離することのできない 最低八つの rūpa からなる。四大要素と硬さ・結合・温度・動きからなる。それらの rūpa の他に upādā rūpas と呼ばれる四大要素から派生した rūpa が 24 種ある。派生した rūpa は四大要素から独立して生まれるものではない。派生した rūpa のうちの四種は四大要素と常に共起する。それら八種の rūpa は体の内であろうと外であろうと物質現象のあるところではかならず存在する。それら四種の派生した rūpa とは、視覚刺激 (色)・匂い・味・滋養。それら四大要素と四種の派生した rūpa は avinibbhoga rūpa・分けることのできない rūpa と呼ばれる。硬さが起こるなら、その時にはかならず、cohesion, temperature, motion, colour, odour, flavour and nutritive essence が共起している。視覚刺激は四大要素を近似の因・proximate cause とする。それらがなければ、視覚刺激は起こらない。

質現象です。例えば、色が目に飛び込んできた時、見ること (seeing consciousness) が起こります。見ることの本質は視覚刺激を捉えることです。

見ることが見る機能を果たします。それは考えたりする機能を果たすことはありません。それは、諸々の条件のうちでも、主にカルマが生起の条件となります。諸々の条件のうちでも、カルマは五感での知覚を条件付けます。すなわち、(自らが過去で為した) カルマが条件となって見ること、聞くこと、嗅ぐこと、味わうこと、触れることが起こるのです。我々の目・耳・鼻・舌・皮膚は過去に為されたカルマの結果²⁶を受け取る為のものです。

DJ: それならば、私が触れる硬さ (hardness) は存在しますか。

AS: 触れた時に知覚されるのは、間違いなく、硬さ (hardness)、柔らかさ (softness)、熱さ (heat)、冷たさ (cold)、圧力 (pressure)、そして、動き (motion) です。風船を触れるのと、水を触れるのとでは、感触が異なります。水に触った時には、冷たさ (cold)・熱さ (heat)、あるいは、柔らかさ (softness)・硬さ (hardness)、あるいは、圧力 (pressure)・動き (motion) はありますか。それらは直接に知覚し得る現象です。過去にあったの異なった経験・記憶をもとに、水に触っているという思いが起こるのです²⁷。

何が実際に生起しているのか、正直であるべきです。そうすれば、徐々に、目を通して現れるのは物質的な硬さ (solidity) ではなく、kalāp としての八つの要素のうちの一つである「色」であるということが理解し得てきます。「色」自体を、他の七つの要素から分けることはできません。「色」(視覚刺激)を物質的な硬さ (solidity) から分けることはできません。花は硬いし、椅子は硬いし、新聞は硬いものです。でも硬さ (solidity) は目を通じて現れるものではありません。

²⁶ 蓄積されたカルマ・kamma のあるかぎり、その結果・vipāka を実現させる感覚器官は必要なもの。カルマがなければその結果は生起することがない。

²⁷ 風船に触れている時と水に触れている時では触覚が異なる。視覚障害者であってもその違いは分かる。各々の柔らかさは異なり、暑さ・冷たさの知覚も異なる。この瞬間でのキーボードの硬さは手足での硬さとは異なる。すべては硬さではあるがラップトップ、足、腕、机に触れる時の硬さはそれぞれ異なる。なぜなら、我々の過去の経験と記憶にもとづいて触れるものに対する概念が異なるからだ。

ん。「色」（視覚刺激）は硬さ（solidity）と共に現れますが、でも目に触れるのは「色」²⁸のみです。

「色」（視覚刺激）は硬さ（solidity）ではありませんが、八つの要素からなるグループ（kalāpa）にあって、硬さ（paṭhavi dhatu・土の要素）と共に生起します。なぜなら、「色」（視覚刺激）と硬さ（solidity）は分けることができない物質現象だからです。

ブッダは瞬時・瞬時に起こる現象を事細かく説きました。我々が命と呼ぶものは瞬時・瞬時に起こっては消え去る現象でしかないと言いました。現象・ダルマとはマコトといえるものです。ブッダはこの真理に目覚めたのです。故に真理に目覚めた者（正等覚者）と呼ばれます。我々もまたこの真理に目覚めることが可能です。

DJ: 先生のおっしゃられた一部ぐらいは理解できます。でもおっしゃられたことはすごく複雑で深淵なことのようには思います。正しく理解する為にはどのようにすればよろしいのでしょうか。

AS: 今、ブッダを理解しようとしているのではないですか。そうですね。彼の言葉は真実のみを語ります。ブッダ以外に一体誰が、真理を語ることができるのでしょうか。ここではほんの少しを語るだけですが、ブッダは四十五年もの間教えを説き続けました。一語一語は底深いものです。ダンマという言葉を考えてみましょう。それはマコトという意味です。ありとあらゆるものはダンマなのです²⁹。

数多くの現象がありますが、それぞれに特徴が異なります。正等覚者はそれら全ての現象のありかたとそれらの特徴に目覚めたのです。「見る」というものを例にとりましょう。「見る」とうものに触れることはできません。それは視覚刺激を知覚する為に生起します。でもただそれだけで、それ以外の機能はありません。聞くという現象が起これば、見ることはすでに消えています。その後、聴覚

²⁸ 色とは視覚対象のこと。

²⁹ ダンマ・現象とは人、木、家などの概念ごとではないとのこと。

刺激が耳に入れば、聞くこと・hearing が起こります・そして消滅します。ここでブッダが示すのはダンマは無我であり・人という概念もないとのこと。私達はコロナに対してコントロールを効かすことができ、それを予防することができますと思っています。でも我々は現象というものがいかなるものかを理解していません。例えば、いまここで知覚する痛みは（自らが過去に為した）悪しき行為の結果であることを理解していません。ある人々はコロナにかかり、激しい痛みを経験します。でも他の人々はそのような痛みを経験することはありません。病気になったり・どれほどに激しい病気になるかは条件次第です。これがダルマの無我性です。カルマの結果をコントロールし得る我などはありません。もし人が視覚障害者であったり聴覚障害者であったなら、我々が今話していることを理解することはできません。五感とところの一つ一つは紡がれ・融合され、見る世界・聞く世界・嗅ぐ世界・味わう世界・触れる世界・考える世界が生まれるのです。それだからこそ、我々は人がいる・物があると思うのです。

ブッダは底深き知覚・認知の世界の性質と機能を解き明かしました。例えば、記憶はその一つです。それはあらゆる意識・citta と共起する現象です。でもそれは我ではありません。五感を通じて現れる現象を除いて、何かを記憶することは可能でしょうか。もし見ること・聞くことがなければ、見たもの・聞いたものを記憶することは可能でしょうか。もし感覚器官での知覚がなければ、何かを記憶することは可能ではありません。このように理解するなら、これが生命のすべてであると理解できます。生死輪廻³⁰にあってこれが全ての生き物の生まれと関わることであることが理解できます。そこにはあるのは現象のみで「生き物」などは存在しません。

DJ: 私が最近出会ったこととお話しします。失恋をした友達の事です。その人の恋人は彼への想いは冷め・一緒にいたくなくなりました。私の友達はとっても悩み・この世の全ては意味のないものと感じてしまいました。このような状況にある人を苦しみから這い上がらせる為には、どのように助ければよいでしょうか。

AS: あなたの友達がその女性と出会うことがなかったなら、恋に落ちること

³⁰ Vatta・輪転。生存の終わりの見えない繰り返し。

はなかったのでは？

DJ: 出会うことがなかったなら、愛着心を起こすことはありませんでした。

AS: 会ったから・見たから、愛着心を起こしたということですよ。

DJ: そのとおりです。

AS: その友達は、見ることはすでに過ぎ去ったものであるとのことを理解していません。無智がゆえに、まだその女性が存在していると捉えるのです。愛着心の原因は無智です。愛着心は一つの現象です。それは存在するものといえるでしょう。誰にでも起こるものです。たとえソーターパンナ³¹(預流者・sotāpanna)でもアナーガミー³²(不還来者・anāgāmi)でも愛着心を携えています。悟りのもっとも高いレベルに至った阿羅漢(arahant)のみが愛着心を根絶しています。

煩惱は、何がそれを引き起こすのかを理解することなしには根絶することはできません。それは我々が何ができるか・何をすべきかということではありません。煩惱の源を知ることのできないのが無智です。無智とはうぬぼれ・自己溺愛・苦の滅を望む欲望のことです。原因が根絶されることがなければ、結果はつきまといまいます。現象の生起・消滅を捉えることのできぬ限り、執着は起こるものです。ソーターパンナの智慧でもって諸現象の生起・消滅を捉えることはできません。でもこのレベルの智慧では執着を除去することはできません。ソーターパンナの智慧ではこの輪廻を彷徨う中で蓄積してきた全ての執着、愛着、欲望、貪欲を根絶することはできません。

ゴータマ・ブッダが悟りを開く以前、彼は計ることのできない程の長い期間、菩薩(Bodhisatta)でした。ゴータマ・ブッダの前世であった修行者・スメータは、

³¹ Sotāpanna・悟りへの流れに入った者。拘束三つを捨てた者、すなわち私見、疑い、儀式への執着。生死輪廻にいまだ彷徨うが最大で七回、その間も地獄・動物界に落ちることはない。

³² Anāgāmi アナーガミー(不還来者)は自らを輪廻に拘束するあと五つの束縛を捨て、死後、この感覚世界に再生することはなく、ブラハマの世界にて再生し、そこで涅槃を証かす。

デーパンカラ・ブツダ³³から長い時³⁴を経た後³⁵にブツダになるとの予言を受けました。

Four Noble Truths を自らで悟らなければなりませんでした。Noble Truth of Suffering、すなわち、全ては生起しては消滅するものとの真理を証かすことがなければ、この世に縛られます。いくらブツダの教えを聞こうとも、この真理を証かすことがなければ、すべてを永久なるものと捉えます。現象に対する真理を理解できない人達に、いかにして執着心を起こすなど言えましょう。

DJ: それは無理です。

AS: 今日理解を起こすことがなければ、何時になったら理解し始めることができるでしょう。ブツダの教えを理解した人達が、それは難しくもなく・深淵でもないと言ったのでしょうか。だから菩薩がブツダになるまでは波羅蜜を培わなければならないのです。ブツダの言葉の慈悲ゆえに、暗黒の世界に光を見るのです。ブツダが未だ存命のおりには、人々は Four Noble Truths を証かし、阿羅漢になることが可能でした。阿羅漢のレベルに至らなくとも、アナーガーミー（不還来者）、サカダーガーミー（一來者）、ソーターパンナ（預流者）のレベルにまで到達しました。たとえ、そのようなレベルにまで到達できなくとも、美しき凡人・kalyāna-puthujjana と呼ばれる人々がいました。それらの人々は、煩惱のあることは確かでしたが、功德を積み³⁶、ダンマを理解し、いずれは自らの煩惱を根絶する人々でした。

³³ Dīpaṅkara はゴータマ・ブツダに先立つ数多くのブツダのうちのひとり。Maitreya はゴータマ・ブツダの教えが消滅してしまって後に現れる未来におけるブツダ。

³⁴ A-sankheyya: 数えることができない。A-は否定の前置詞。

³⁵ Kappa・劫: 輪廻の長さを表す時間の単位。10億年(?)。

³⁶ **Accumulations**・蓄積、積み重ねとは pakatupanissaya paccaya・自然近依縁。良き citta・悪しき citta は生起しては消滅する。しかし良き悪しき行為を営む傾向は失われるものではない。それは次の citta に次々と積み重ねられていく。良き悪しき行為は自らの癖となり、将来での kusala・akusala の生起を条件づける。たとえば、過去に教えを聞くことは未来にまた教えを聞こうとする条件となる。各々の citta には潜在的な傾向・anusaya が蓄積されている。たとえば、感覚刺激への執着、嫌悪、誤った見解、疑い、生存への執着、無智などがそれらである。直接的に起こることがなくとも、それらは潜在的に citta に潜んでおり、いつでも akusala citta として表にあらわれる。そのような煩惱は涅槃を証かしていく過程で段階的に除去され、阿羅漢のレベルに至って根絶される。(参照: Nina van Gorkom.)

ブッダの教えは過去のみではなく今日の世にも未だ栄えています。もしあなたの友達が愛欲を捨て・苦しみから逃れたいのなら、智慧を磨き、ソーターパンナ（預流者・sotāpanna）のレベルにまで到達すべきです。布施に関してもっとも気前のよかった Visākhā Migāramāta は在家であったにも関わらず、幼い頃より、ソーターパンナでした。結婚をし・多くの子供を産み・多くの孫に囲まれました。煩惱は一発で根絶することはできません。（ソーターパンナとして）無智と「我が存在するとの誤った思い」がまず根絶されなければなりません。そして智慧を培い・残りの煩惱もゆっくり・ゆっくりと根絶していかなければなりません。

愛欲・貧欲あるいは他の苦から逃れ得るか否かは、その人の理解レベル次第です。友達を助ける最高の手立ては真理を理解する為の手助けです。真理を理解し・苦から逃れたいと思っても、完全にこの生死輪廻から逸脱したいと未だ思わないのなら、少なくとも何が良き行いであり・何が悪しき行いであるかを理解すべきです。そうするなら、健全な生活を送り・自らと他の人々に害を及ぼすことはありません。悪がなければ、この世界はもっと住み良い場所になるでしょう。疫病が広がり・困難なことが起ころうとも、状況に関わりなく、動揺なきところは、お互いの幸せに役立ちます。

DJ: どうすれば、悩む人々がここを開き・ブッダの教えを聞くことができるでしょうか。

AS: ブッダの教えをたとえ一語でさえも聞こうとする態度があるかどうかを尋ねてみることです。一部の人達は時間の無駄で・価値のないこととし、全く聞こうとしません。まずは、何が健全なことで何が不健全なことかを知るべきです。不健全なことを減らす方法・悪しき行為の積み重ねを避ける方法があることに自信を持つべきです。基本、もっと教えを聞くべきです。たとえば、子供達に、教えを説き聞かせれば、少しずつ、しっかりと、理解していくものです。これは大人が本を通じて Noble Truths を学ぶこととは異なります。その場合は言葉とその意味を知るぐらいのものです。

DJ: しかし子供達を教える教師が内容を理解していないという可能性はありませんか。

AS: もちろん、その可能性はあります。もし三蔵³⁷の言葉すべてを理解していたなら、今ここで現れている現象と言葉とを完全に照合させることができるでしょう。

DJ: 我々が恐れなければならないもの・克服しなければならない恐れとは、無智です。

AS: その通りです。無智あるいは誤った見解は真理を破壊します。ここで少しばかり meditation center のことについて話をしてもいいですか。

DJ: はい、どうぞ。

AS: 三蔵のどこにもブッダが弟子達に向かって何時間も座禅を組んだり・横たわったり・歩いたりすべきというような教示はありません。何を理解する為にそのようなことをしなければいけないのでしょうか。この輪廻を彷徨う中でゴータマ・ブッダの前世であった修行者・スメータはディーパンカラ・ブッダから長い時を経た後にブッダになるとの予言を受けました。人々はそのことを聞いて歓喜しました。たとえディーパンカラ・ブッダの時代に悟りを開くことができなくとも、未来のゴータマ・ブッダの時代にそれが可能となるからです。修行者・スメータは輪廻にあって計りもできぬ長い時のあいだ二十四人のブッダと遭遇しましたが、その間も人々はゴータマ・ブッダの誕生を待ち続けました。

当時の人々と比べ今日の人々は何も理解することはありません。ただ指示された場所に行くのみです。ただ訳の分からぬことを行うのみです。ブッダの教えを聞くことも・理解することもありません。ただ願望をいただくのみで、理解などはありません。Meditation を練習した人達に何か学んだことがありますかと尋ねた時、その答えは、気持ち良くなったというものでした。

反して、きちんと教えを学び・教えを聞く人々が望むのは、現象の生起・消滅を証かすことと煩惱の根絶です。教えを实践する為に何処かに行かなければならないことはありません。理解というのは特別なことをするか特別な場所に行くことと関わるものではありません。何処かに行こうとすること・何かを行おう

³⁷ T i-pitaka ・三蔵。律蔵・経蔵・論蔵。

とすることは誤った考えであり、無我というものを理解していません。仏教徒であるならば、ブッダとは、智慧を意味すること・賢者を意味することとを理解すべきです。現象を理解する智慧がなければ・ブッダの教えを理解する智慧がなければ、仏教徒と言えるでしょうか。真理の理解に間違いがあるなら、そのことを認めるべきです。さもなければ、無智に導かれ、愚かなことを行い、あらゆる害を導きます。

DJ: なら、meditation center に行き、座禅を組むことは仏教を学ぶことではないのでしょうか。

AS: いったい何が meditation center なのでしょう。そこでいったい何を行うのでしょうか。

DJ: 座禅です。

AS: どうして座らなければならないのでしょうか。今げんに座っているではありませんか。

DJ: 教えられたことに従う為です。

AS: 誰によって教えられたというのですか。

DJ: 座禅の先生によってです。

AS: 一体誰が座禅の先生なのですか。

DJ: その質問には答え難いです。

AS: 分かるでしょう。無智ゆえに meditation center に行くのです。より無智を重ねることになります。

DJ: 無智ゆえに、座禅の先生を知識のある人と捉えるのですね。

AS: ブッダはいったい何を説いたのでしょうか。

DJ: 彼の教えを学ぶことなく、自分自身に誤った考えを導くのですよね。

AS: ブッダの深淵なることばを理解することなく、自分自身の考えに固執するのは間違いではないでしょうか。

DJ: ブッダの言葉を学ぶことがなければ、私達自身の考えを仏教と呼ぶことはできません。

AS: Meditation center に行く人達はいったい誰の言葉を聞いているのでしょうか。ブッダはけっして人々に対して、座禅を組みなさい・立ち続けなさい・眠ったり横になってはいけませんなどとは説きませんでした。

タワンラット Thawanrat というウィパサナー・vipassanā の先生がいました。しかし彼はそれを教えることを辞めました。それはまったく間違っただけであると理解したからです。生徒に何をすべきかを教えることができなくなった時、彼らに草むしりをしなさいと教えていたそうです。そのようなことが理解に導くものでしょうか。

DJ: 草むしりをして何が理解できると言えるのでしょうか。

AS: そのとおり。Vipassanā の指導者が自らの無智ゆえにそのようなことを教えていたのです。

DJ: それならばどこでブッダのことばに触れることができるのでしょうか。

AS: ブッダの教えは三蔵に納められています。すなわち律蔵・経蔵・論蔵。それらはいつ世にあっても真実を説きます。それらは今ここにあってマコトを説きます。

DJ: なら三蔵を学べということなのですね。

AS: そのとおりです。ダルマは微妙で・奥深く・見難いものです。それらはブッダが悟りを開いて後に・真理に目覚めて後に述べられた言葉です。私達はそれらの言葉を深く考えたことがあるのでしょうか。それらはあまりにも深淵であるが故に、ブッダは世に知らしめることを躊躇しました³⁸。しかし世にはそれらを

³⁸ 参照：Ayacana Sutta: The Request" (SN 6.1)

理解し得る人々がいるとのことを知り、梵天・Brahma の勧請を受け、教えを世に知らしめたのです。

DJ: これはとても微妙で理解し難きものです。どのように始め・どのように理解して行くべきでしょうか。

AS: Pāramī・波羅蜜・perfection という言葉を聞いたことはありますか。

DJ: はい、あります。

AS: でも、それはどのような意味でしょうか。私達は深くその意味を考えたことはありません。それはこちらの岸・此岸から、向こうの岸・彼岸に至ることです。此岸にあっては煩惱が満ちており、一瞬・一瞬の意識が潜在的な悪しき傾向・latent tendency に汚されています。潜在的な傾向により、煩惱がより広がっていくのです。そのような潜在的な傾向は、悟りを開くまで持続します。悟りを開けばやっと彼岸に到達します。そこにはもう潜在的な傾向も煩惱もありません。

DJ: そこに至るまでにはどれほどの時間が必要でしょうか。波羅蜜のすべての要素が培われなければなりません。波羅蜜なしでは、すなわち、ダルマを聞き、それを理解し、勤勉で、真理に忠実で、真面目で、願う心深く、真理を理解するための動揺なき信仰なしでは、どのようにして苦から逃れ得るでしょうか。

AS: Meditation center に行って何をしようというのでしょうか。どこにブッダの言葉があるというのでしょうか。ブッダは波羅蜜を説いたのです。悟りを開く前にどれほどの長い期間それを培ったことでしょうか。ブッダの優れた弟子達もそれらを培ったのです。今日の人々はそれらのことを少しでも理解しているのでしょうか。でも人々は単に meditation center に行くことに興味を抱くのみです。これは害あることではないでしょうか。害をもたらすのはコロナだけではありません。無智はコロナ以上に害のあるものです。無智はどのように根絶できるでしょうか。ブッダの慈悲を評価することがなければ、無智は蓄積されるのみです。ブッダは正等覚者 (Perfectly Enlightened One) になる為に波羅蜜を培ったのです。聞いたならばダルマを理解し得る人々の為に培ったのです。

DJ: ブッダの教えを脅かすものはありますか。

AS: はい、あります。

DJ: それは何ですか。

AS: 誤った理解です。ブッダの教えは易しい・それを勉強する必要などはないとの考えです。このようなことを聞いたことはありますか。

DJ: 学ぶ必要などないということですか。

AS: ブッダの教えはとてつもなく深淵です。それは学ばれるべきものです。どうして人々はそれを学ぼうとしないのでしょうか。学ぶということは一語一語を注意深く考察すること、今ここでの現象を説く言葉を理解することです。でも学ぶことなく自分勝手に解釈するのみです。ブッダの教えを理解するほどに優れた理解はあるのでしょうか。でも、多くの人々はダルマとは何ですか、ariya-saccaとは何ですか等の質問に対してさえも答えることはできません。Ariya-sacca はダルマの一種です。例外なくすべてはダルマです。ダルマは良きダルマ（健全なる現象・kusalā dhammā）、悪しきダルマ（不健全なる現象・akusalā dhammā）、無記のダルマ（健全でも不健全でもない現象・avyākatā dhammā）とに区別されます。タイではどのお葬式にあっても、“Kusalā dhammā, akusalā dhammā, avyākatā dhammā”との読経を聞きます。でもどれ程にその意味を理解していますか。でも理解することなく meditation center³⁹に行くのです。

座禅を教える先生達は、ほんとうに人々の煩惱を除けると思っているのでしょうか。ブッダは四十五年間、昼夜を問わず、誰よりも長く教えを説きました。深夜には天界から神々⁴⁰も質問を尋ねに訪れました。ブッダが悟ることなく・教えを説くことがなかったならば、私達には一言さえも教えを聞く機会はありませんでした。

³⁹ Meditaion center に行くのは自らの無智を晒しているようなものだ。ブッダの教えを正しく学んでいないとのことだ。結果として、誰かコントロールできる者がいて、結果を獲得することが可能との誤った考えをいただく。正しい理解は教えを学びことから始まる。どうしてわざわざ特別な場所に行かなければならないのか。理解すべき現象とは meditation center に行かなければ見つけられないと思っているのだろうか。誤った実践・practice は存在もしない私の想いによるもの。結果として執着と無智をより積み重ね、私の思いをより強固にするのみである。

⁴⁰ Deva・天神。天に住まう者。神として訳され、通常複数形・devā で用いられ

五感覚器官とところで日々経験する見ること・聴くこと等の *nāma* 全ては、*saṅkhata dhamma*⁴¹ (有為の現象・*conditioned realities*)。一定の条件が満たされる中で、生起し・消滅する現象です。「無常・苦・無我」に打ちひしがれた現象です。涅槃は、*asaṅkhata dhamma*⁴² (無為の現象・*unconditioned reality*)。生起することも消滅することもない *nāma* です。無我ではあるが「無常・苦」の様相は帯びぬものです。

ブッダは慈悲でもってダルマ全ての微細さを説きました。生死輪廻にあって計ることもできぬ長い間、人々が無智を蓄積してきたことを知っていたからです。Kusala と akusala の違いを知ることがなければ、ありとあらゆる悪しき行為を為すこととなります。現象に関わる真理を理解することなくしては、その危険性を回避することはできません。何がマコトかを知ることによりモラルをまっとうする人間へと変身することができます。悪から手を引くことができます。

DJ: 何が今日の仏教界が直面する問題でしょうか。

AS: 仏教とは正等覚者の言葉を意味するものです。人々がブッダへの畏敬の念を抱くことなくそれを学ぶならば、仏教の崩壊がおこります。畏敬の念を持ち、教えの細部までをも学ぶ態度を持つ人々のみがそれを正しく学び得ます。一語一語の意味が三蔵全体と合致するものか否かにも気を配るべきです。

一例は、“All things that are real are dhamma”・「マコトなるものは全てダンマである」というフレーズです。これには、我なるものが入り込む余地があると述べる人々がいます。全てのダルマは例外なく無我と述べられているのに、なぜそのような解釈をするのでしょうか。このような誤りを犯さない為にも、真実は正しく吟味されるべきです。

自らの怒り・執着・悪行・見ることをコントロールできるでしょうか。今会話を聞いていますよね。その聞くことを止めることは可能でしょうか。もし聞くことを止めることは可能だと思うなら、すべては無我であるとのことを理解していません。ダルマは適切な原因と条件があれば生起します。適切な条件がなければ

⁴¹ Saṅkhata・有為の：条件がととのえば起こる現象。我々が五感器官とところを通して経験する現象全てを指す。

⁴² Asaṅkhata・無為の：涅槃を指す。条件によって生まれたり消えたりすることない現象。

生起することはありません。もし目がなければ、我々は何かを見ることができ
でしょうか。

DJ: いえいえ、それは無理です。

AS: Eye-base (感覚器官としての目) が生起する原因がなければ、魔法使いで
あろうとそれを生起させることはできません。Eye-base は物質現象です。物質
現象は何かを知覚するものではありません。それは rūpa-dhamma と呼ばれるも
のです。あらゆるダンマと同じく rūpa は条件によって生起します。それらは、
カルマ (過去の良きあるいは悪しき行為) ・citta・温度・滋養によって生じます。
滋養とは生き物が消化した食べ物のことです。それによって生き物は生命を維
持し得ます。他種の滋養⁴³も存在します。

DJ: スチン先生。先生のおっしゃられることは完璧だと思います。無智によっ
て誤った理解が害をもたらします。だからダルマの全ての側面を学ぶべきです。

AS: 畏敬の念をもってダルマを学ぶべきです。教えの存続の為にもお互いが協
力すべきです。この生死輪廻にあってダルマに接する機会は稀なことです。もし
教えが消滅したならば、それが再び現れるまでには計りもしれない時間が必要
となります。教えを聞くことは人生にとってとつても価値あることです。
Meditation Center に行ったりブッダが教えもしなかったことを説く人々に耳を
傾けることはとても危険なことです。教えの消滅を導きます。

DJ: まことに、そのとおりですね。

AS: 無智より危険なものはこの世にはありません。誰もは何かを欲しています。
我々は幸せと安楽を望みます、でもそれらを手に入れる原因を知りません。私た
ちは世界で流行っている疾病から身を守りたいと思っています。もし疾病が温
度 (utu) が原因で生まれるなら、それは治療可能なものです。科学・医学でも
って治療が可能です。しかし治療が可能でないものは自らのカルマによるもの

⁴³ 滋養・ojā に関する教えは生物学的側面と精神学側面を持つ。ブッダによればそれは次の四種
に区別される: edible food, sense-impressions, volitions, and consciousness. 空腹が滋養・ojā の
概念を端的に表す。生まれてから死ぬまで私たちの身体は食物を欲する。身体の維持のみではな
く、感覚刺激の受容、それに伴った行動及び思考が可能なのはすべて空腹にて摂取する滋養・ojā
による。(参照: The Four Nutriments of Life: An Anthology of Buddhist Texts.)

です。もしカルマが悪しきものならいくら治療を行おうとも行えるものではありません。

DJ: もしカルマが良きものなら、治療の結果は良きものとなりますね。

AS: 誰も良き結果の生起を止めることはできません。結果というものは諸々のカタチをとるものです。人生での諸々のカタチ、たとえば、顔・スタイル・知識・地位・名誉は個人個人で異なります。ブツダの教えは複雑で緻密なものです。Cittaは一瞬に生起・消滅して、再び戻ってくることはありません。見・思い・考えるなどの要素が結合する過程にあって citta が起こり・次の瞬間の citta へと受け継がれていきます⁴⁴。

この世には数えも仕切れないほどの学問分野が存在します。しかしダルマほどに奥深い分野はありません。それにも関わらず、私たちはダルマを学ぼうとしません。もし畏敬の念をもってそれを学ぶことがなければ、ダルマは滅びてしまいます。ブツダほどにダルマを理解している者はいません。この宇宙にあってダルマを説くことができるのは正等覚者のみです。

DJ: よく言われました、先生。丁寧に学ぶことがどれほどに大切かを教えていただきました。三蔵を畏怖の念をもって学ぶことの大切さ⁴⁵を教えていただきました。

AS: 死因がコロナかそれ以外かは分かりませんが、いずれ我々全てはこの世から去らなければなりません。次の世に持って行けるものは自らが積んだ功德と正しい理解のみです。ダルマを聞き学ぶ機会があるにも関わらず、我々はコロナ

⁴⁴ Paccaya・conditions・縁: ここでの文章では paccaya・縁というものが語られている。各々の citta は感覚刺激 (sense object) あるいは精神刺激・考え (mental object) を知覚する。それらは ārammaṇa-paccaya・刺激条件でもって機能する。Citta と citta の間には何にも挿入されるものはない。これは条件としては samanantara-paccaya と呼ばれる。感覚刺激は過去の行為・kamma の結果・vipāka ゆえ、条件としては kamma-paccaya と呼ばれる。また、kamma-vipāka は近接的な縁ゆえに、upanissaya (近接) -paccaya と呼ばれる。

⁴⁵ スチン先生は正しい理解は三蔵と対応しなければならないと述べる。DJ Banhorn さんはそれは三蔵を完璧にマスターしなければならないと理解した。しかし学習とは本を学ぶことのみを意味するのではない。ブツダが説く理解とは今ここでの現象を理解することである。本のみによる理解は今ここでの現象を理解することではないが、それを培う役には立つ。正念を生起させる者はいない。もし正しい理解がなければ、誰かが何かを行うとし、結果的には教えにそむくこととなる。これが、教えの微妙な点である。

のようなものに恐れ、学ぶ機会を逃しているのかも知れません。自らの無智がどれほどに危険なものかを理解することはありません。

DJ: まったくおっしゃる通りです。無智の方がコロナより恐ろしいです。先生のように無智の恐ろしさを説く人と今までに出会ったことはありません。

AS 我々が無智を恐れなのは、それがどれほどに害のあるものかを理解していないからです。

AS: 無智の害から逃れ得ましょうか。

DJ: 無理だと思います。

AS: 人々は正しい理解の意義と無智がもたらす害を理解していません。ダルマを学ぶことは自らと他の人々に理解と知識をもたらします。どれ程に利益があることでしょうか。

DJ: あらゆる種類の利益です。

AS: 自らと他の人々への利益です。

DJ: すなわちあらゆる人々への利益ですね。

AS: もし誰もが理解の価値と無智の害を見ることができたなら、その利益は計り知れないものです。

DJ: 最後にスチン先生。仏教徒達に述べる言葉はありますか。

AS: 真剣でありなさい。ブッダとは賢者との意味です。ブッダは我々自らでは理解し得ることのないものを説きました。仏教徒とはブッダの説いたことを理解する人々のことです。ブッダの一言一言を注意深く学ぶべきです。三蔵すべてをできるだけ完璧に学ぶべきです。

多くの人々は時代が変わったのだから bhikkhu⁴⁶がお金を受け取るのは問題ないと考えているようです。これは家庭を捨て出家した者に対して定められた戒律に違反するのです。在家での贅沢な生活を捨てて出家したにも関わらず、どうして金銭を受け取り管理することが許されるのでしょうか。出家とは全てを放棄することです。戒律・Vinaya を学べば理解できることですが、出家の目的は煩惱の滅です。煩惱の根源である無智がもたらす害を理解するならば、akusala を除き、煩惱の根絶が可能になります。これらのことを理解した者は sāvakas (listeners or disciples) と呼ばれます。ブッダは彼らを自らのところから生まれた者達であると呼びます。自らの智慧と知識でもってブッダは出家の利益を説きました。ダルマを学ぶことの・煩惱を除去することの利益を説きました。

出家の生活は全ての人々に適したものではありません。そのような厳しい生活に適した性質を持っていないからです。しかし、ダルマを理解するなら、医者 of Jivaka Komārabhacca のように、在家にあってソーターパンナになることは可能です。ブッダが未だ生存の折には、数多くの在家者が noble disciples・聖なる愛弟子になりました。現象を悟り証かし、ソーターパンナのレベルにまで達することができたのです。もし在家が阿羅漢レベルの悟りを証かしたならば、その時には家を捨て出家の身にならなければなりません。サフロン色の僧衣は出家を意味し、阿羅漢をイメージさせるものです。Bhikkhus and bhikkhunis⁴⁷は阿羅漢ではなくとも、煩惱の根絶に全力を尽くしている者達です。在家もまた出家と同じ目的をもって、自らの性格・能力に相応し、努力すべきです⁴⁸。もし自らが仏教徒であると宣言するなら、自らの理解はブッダの悟りと相応したものでなければいけません。ブッダは偉大な慈悲でもってダルマを説きました。それゆえに現象の微細さを我々は知ることができます。我々に理解がある限りは教えは持続します。今の世だけでなく長い長い未来にあっても保たれ、人々の為になります。もし教えが学習されることがなければ、それは衰退し・消滅してしまうでしょう。

⁴⁶ Bhikkhu・比丘：乞食者。

⁴⁷ Bhikkhuni・比丘尼。

⁴⁸ 最後に一言加えるなら、仏教学習とは、本のための学習ではない。大切なのは今ここでの現象を学習すること。それには終わりというものがない。我でもって行う学習ではない。我の為にと思うなら、それは誤りである。

DJ: スチン先生、今日はまことにありがとうございました。感謝いたします。

AS: どういたしまして、こちらこそ、ありがとうございました。